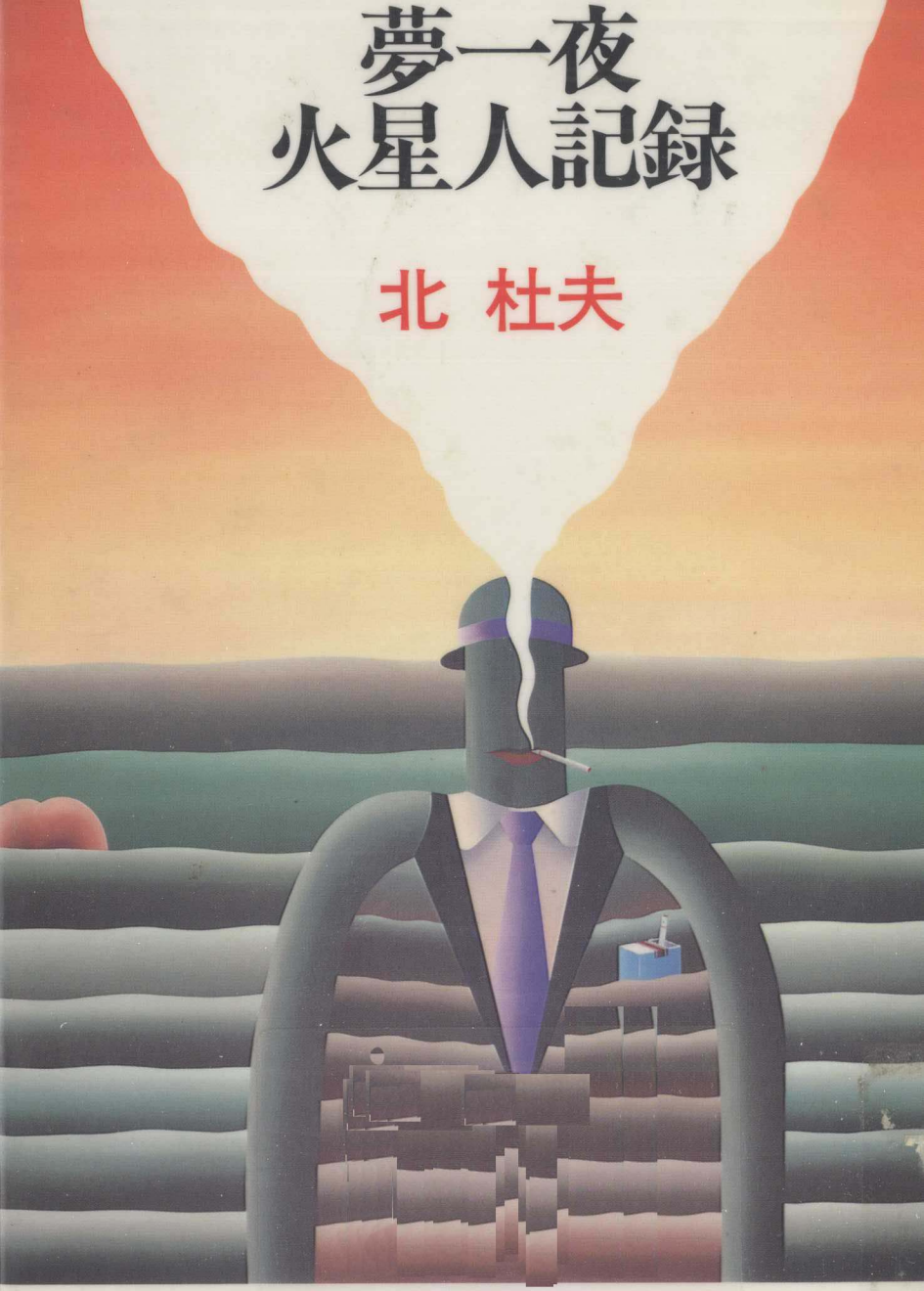
夢一夜
火星人記録

北 杜夫



新潮社

夢一夜·火星人記録

北杜夫

江苏工业学院图书馆
藏书章

新潮社

夢一夜・火星人記録

印刷――一九八九年七月五日
発行――一九八九年七月一〇日
著者――北杜夫
発行者――佐藤亮一
発行所――株式会社新潮社
所在地――162 東京都新宿区矢来町七一
電話――（業務部(03)二六六―五一一一
編集部(03)二六六―五四一一）
振替――東京四―八〇八
印刷所――株式会社光邦
製本所――加藤製本株式会社
© Morio Kita 1989, Printed in Japan
価格はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN4-10-306226-6 C0093

目次

似我蜂と少年　7
簞笥とミカン　49
夢一夜　79
火星人記録　87
素晴らしいぼくのおじいさん　99
神童　109

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

お話おじさんのレコード　119
二銭銅貨　127
ヘソのある蛙　その他の動物メルヘン　133
酒嫌いの大飲ん兵衛　147
竜頭蛇尾情事事件　159
およそダメなあたしの夫　185
あとがき　215

装画　久里洋二

夢一夜・火星人記録

似我蜂と少年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

――固定観念というもの、そのまわりに築かれた高い垣に対する諷刺と言えば言えぬこともないが、実はそんなことはどうでもよく、ただなんとなくへんてこなる作品。

1

二十世紀の或る晩夏の午後のこと。本当は歳月なんて全くかまわなくてよいのである。かなり古い話であってもかまわぬし、太平洋戦争の最中でも一向に差支えなく、なんなら何年も前のこと、実は昨日のことであっても宜しい。もっとも次のような記述があるから恐らくは敗戦後いくらか経っての話であることは確かなことらしい。

ここは東京の郊外で――これも仮りにそうしておくまでの話だ――畠の間を一本の桜並木の道がずうっと通っており、向うには洋館の赤屋根がちらほら見え、こちらにはちょっとした雑木林がある、凡そありふれた場所なのであった。別に辺鄙なところでもなんでもなく、五分も歩けば諸君は郊外電車の一つの駅に出られるだろうし、そこにはかなりの商店が密集

していて、晩御飯のおかずでも或いは半世紀のあいだまったくインクをつけないで書けると称する万年筆や筆ペンやボール・ペンやらを売っていた。何でも買うことができるということは、敗戦直後の何もない時代に比べれば素晴らしいことである。

空は晴れわたっていた。曇っていたとて何も都合がわるい訳ではないのだが、生憎と青空には雲がひとひらくらいしか見られなかった。太陽は自棄になって下界に照りつけ、油蟬がこれまた癇癪を起して鳴きわめいていた。並木の桜の葉っぱは毛虫に食われて穴だらけになっていて、あまりの醜態にちぢれあがり、早く秋になって地面に落っこちたいものだとしきりに身もだえしていた。

時々わずかばかりの風が東南の方角から吹いてくれて、さもなかったら暑くて気絶してしまうことであろう。ずっと見渡したところ、どこにも人影はなく、「なにかへんてこな事件はないものかなあ。あったらば早速小説に仕立ててやるのだが……」などと考えている人物がここにいたとしても、退屈しきって居眠りをしてしまったにちがいない。

ところが驚いたことに、その退屈な桜並木の道を向うの方から歩いてくる者がある。白い丸首シャツに、白い長ズボンに、白い運動靴という扮装で、全身これ白ずくめである。しかし決してお化けなんぞではなく、近づいてくるのを見ると、なんのことはない一人の少年であった。別におどろく必要もなかったのである。ただ、あの子はよっぽど白い色が好きなの

だな、いや、お母さんの趣味かも知れないな、いいや、夏だもの誰だって白いものを着ている筈だ、つまらないことを気にかけると今夜の夢見がきっとわるいぞ、などとひとしきり呟いて少年を見送ってしまえばよい訳である。

だが、実際のところ、少年は私たちの視界を遠ざかりはしなかった。奇妙なことが起ったのだ。少年は不意に路上に中腰になると、そのままの姿勢で横の方にいざりはじめた。その様子がいかにも緊張しきって真剣そのものであったから、誰だってこいつは大異変が勃発したなと直感してしまうことだろう。あまつさえ、少年はとうとう道端にしゃがみこんでしまった。そしていっかな動きそうもないのだ。事態がこうなったら、私たちももっとそばへ近よって見るのが当然だろう。

近づいてみてわかったことだが、少年は中学三、四年の年頃で、身体は標準よりも小柄であり、うすい浅黒い皮膚を持っていた。その浅黒さは彼が丈夫であることを示すものではなく、あきらかに先天的に浅黒く生れついたもので、往々にして貧血を起して鉄剤を飲まされたり、青肌の魚を食べるとじんましんが出てしまう、あのいじらしい弱点を有する体質らしいのである。彼の口は少し大きすぎ、額は出っぱりすぎていたが、瞳孔の大きい切長の目はうつくしいと言ってもよく、しかも潤ってやさしかった。こういう目は黙って物事をじっと見つめる性(たち)を有するのだが、しかし物事の奥底まで見極める力は案外乏しいようである。た

だ、やたらにキョロキョロしたり、まるで見る機能を有さないような目よりはずっと勝っているだろう。こめかみの辺りに汗が滲んでいたが、少し動けば並木の日陰にはいれるのに、彼は日光に直射されたまま、じっと何かを見つめていた。何を見ているのだって？　それはとても分かるもんじゃない。諸君にはとても分からないことなのだ。だから私が少し説明することにしよう。

一体、小説を書く連中なんてものは、物語に出てくる人物のあらゆる裏面まで知りぬいているようだし、又どうやら知っていなければいけないものらしいから、ひとつ私も真似してこの少年のことを少し書いてみようと思う。

彼は本名を金山あつしというが、「あつし」という名は大変暑い夏の日に生れたから、彼の父親がかく名づけたのである。父親は某大学の経済学の教授で、タヌキに似た容貌にもかかわらず世人の尊敬を受けている人物だが、あつし少年には母親の血がより多くまざっているようだ。母親はものしずかな、しとやかな寡黙の婦人で、若い時にはかなり美しかったに違いない。その代り料理とか裁縫とかはからきし駄目であった。応接間にある、里から持ってきた古びたピアノの前に腰かけて、なにげなく低い消えいるような音でショパンの前奏曲などを弾くことがあるが、そんなに上手いとは言えず、そんなに下手であるとも言いきれない程度の代物であった。それから、彼女の兄はかなり有名な博物学者である。専門は羊歯植

物の分類などだが、その方面よりかえって広く浅い一般博物の紹介で世に識られている。ところで当のあつし少年は、今のところ中学の四年級に在籍していて、成績は良くも悪くもない。体操と国語が嫌いで、図画と理科が好きで、数学は好きでも嫌いでもなかった。特に博物はアイスクリームより好きで、植物や昆虫の標本を牛に食わせるほどどっさり持っている。そればかりか毛虫を飼育したり、高山植物を培養したりしている。彼は万事あきっぽい性質なのに、いったん虫や花のことになると、たまげるくらい綿密な性格になってしまう。どんなにか彼の標本は見事に作られていたことだろう！　それから、彼が採集しているところを見るならば、いつもは臆病でものぐさな少年が、いかに熱心に精力をかたむけるかが分かるはずだ。たとえば息をきらして登りつめた山の坂道で、不意に素晴らしい孔雀蝶（くじゃくちょう）でも見つけようものなら、彼は蝶を追って坂の下まで駈け降りてしまうのだ。あげくの果、蝶には逃げられるし眩暈（めまい）はするし、彼は思わずべったりと土の上に腰を下ろしてしまうのだが、そこに珍しい蟻でも這っていようものなら、血眼になって蟻をとっつかまえ、毒薬の入っているガラス管にぶちこんでしまうのだ。あつし少年はざっと言えば、こんな具合になかなかの自然研究家なのである。

2

ところであつし少年は今日、母親からちょっとした買物を駅の附近でするように命ぜられて、ちょうどこの桜並木を通りかかったのである。そして常にやるように、うつむきかげんに前方の地面をぼんやり眺めながら、半ば投げやりに両足を交互に動かして歩いてゆくと、ふと彼の眼に映ったものがある。それは青虫を運んでいる一匹のジガバチであった。ここでまた、私はジガバチについて少々長たらしい説明を加えねばならない。

ジガバチという昆虫は、分類学上から言うと膜翅目のジガバチ科に属し、学名はAmmophila infesta Smithという。腹部に赤い帯のある、黒光りのするほっそりとした身体を持っており、六つの脚も黒くて大変長く、翅は身体に比して小さく透明である。この蜂はいわゆる狩猟蜂と呼ばれるもので、ある種の蛾の幼虫を見つけると尻の針で麻酔薬を注射する。すると青虫はたちまち麻痺して、まったく運動能力を失ってしまう。ジガバチは地面に穴を掘ってその青虫を引きずりこみ、ひとつの卵を産みつける。それから再び丹念に穴をふさいでから次の狩りにと飛んでゆく。卵から孵ったジガバチの幼虫は、半死の状態にある青虫を食べて大きくなり、やがて一人前の蜂になるという寸法なのだ。この蜂が穴を掘る時

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com